

第三章 先人達が残した上江用水の歴史を語る

ことも求められている。上江用水を異なる角度から見つめ続ける、地元の人々が集まり、後世に残したいエピソードや今後への提言を行った。



前列左より、岡本郁栄氏、清沢聰氏、保坂昭子氏、古川守氏（平成29年12月6日）

三五〇年以上の長きにわたり、高田平野の田園地帯を潤し続けてきた上江用水。幾多の難工事を成し遂げて完成した水路や水をめぐむる争いは、先人たちがこの土地で生きていく決意を持っていくことの証左でもある。

平成二十七年（二〇一五年）国際かんがい排水委員会（ICID）から「世界かんがい施設遺産」に認定され、その役割は実用だけでなく、世界へ向けその重要性を伝え、後世に残すことにもつながる。板倉町史ではもう少し整理した形で載せることになった。世界かんがい施設遺産に指定されてからは「天正年間説」が前面に出ていて、それが

◆上江用水と土木技術について

司会 平成二十七年一〇月、世界かんがい施設遺産に登録された上江用水について、文献などに記載されていないものを後世に残したいと考えています。みなさんに気軽に話していただければ、と思います。

清沢 二五年くらい前に「上江用水史」（平成六年刊行）ができて、その後板倉町史ができた。上江用水史を編纂するとき、大きな議論になったのはその開発過程。一期と二期をどこで分けるか。言い伝えや伝承が根拠にならざるを得ない。最も古い「天正年間」の根拠は明治になってから出てきたものだ。用水路の経営自体が変わった頃、過去の歴史をまとめようということになり、その時のものが歴史を語る際の根拠になっている。

しかし、後世の研究者は根拠を裏付ける文献がないので、違った側面から調べていく。そうなる。「ちよつと違うんじゃないか」ということになった。その時は両論併記になった。

板倉町史ではもう少し整理した形で載せることになった。世界かんがい施設遺産に指定されてからは「天正年間説」が前面に出ていて、それが



清沢 聡氏／江戸時代の歴史研究家

固定化されつつある印象だ。今後、若い人に語り継ぐときは諸説を伝えていった方が良いと思う。いつか諸説は解決されるはずだ。

岡本 大正年間から昭和初期間に作られた図を見ると、小さな水路を越えるための樋とびがいくつもある。関田山系から来る水が用水に入ってしまうので、その水を大切にするため、樋を作ったのかなと思っ



岡本 郁栄氏／上江用水史の編纂。地理学専門家。板倉郷土史愛好会 会長

保坂 我が家の蔵を整理していたら、用水の工事に使われた用具があったな、と思い出した。昔の分度器や曲がり尺は捨ててしまったが「ああ、取っておけばよかったな」と思った。蔵を整理しながら、上江用水の歴史を再認識している。

古川 用水を利用する中で大変だったんだろうな、と思うのは、維持管理。昔は三面張りがなかったので、水を通すにも水漏れがあったろうし、流す上での維持管理も大変だったろう。地域間で格差もあったし、今のように県や国からの支援もなかった。そんな限られた体制の中で、どんな風に維持管理をしていたのかは知りたい。

◆ 反対する下流集落への対応について

司会 上江用水を開削するとき、用水が横断する川の水を利用する人が「自分のところへ流れていった、利用できる水を持っていかれてしまう」という不安もあったと推察されま

たのでしようか。

岡本 当時の人が書き付けでも残しておいてくれればね（笑）。既得権を確認している証拠だ。

保坂 長い訴訟の手紙を引っ張り出してきた。用水の訴訟を起こした資料は結構ある。

清沢 全国的に「既得権を犯さない」旨の措置が執られていることが一般的か、越後が特別だったか分かるとよいのだが。

『上江用水史』を執筆するとき、当時の土木技術が分からなかった。絵図のことから考えられるのは、当時の人は争いをしたが、絵図が残っているということは、争いの結果、共存することを選んだのではないか。それが当時の意識ではないかと思う。

当時の農民は、現代と違って藩主などの支配者がおり、勝手なことではできない。文書や記録は残っていないが、絵図がその証左ではないか。

岡本 絵図を見たとき、九〇mに一箇所くらい水を取った、取らないが書かれている。一つ一つ寸法が書いてある。水量を非常に気にしていたのではないか。寸法の中には九寸、五寸というのまである。そのくらいでも通水を確保する、絵図面に書き込む。水をもらう側はとても気にしていたのだろう。

保坂 我が家には定規があった。下流の人が家に来て来て、定規を借りてそこを計って。でも、その人たちが帰ると、木陰に隠れた人たちが、かさを上げたりして。

清沢 当時の農民は公平性を重んじていた。みんなが納得する基準作り。それが現れている。

保坂 水量が収穫に影響する。

岡本 高田藩としても、耕作面積より石高を重視していたようだ。石高は水量と直結するので、そういう寸法は大事にしたのだろう。

◆後世に残すべき逸話について

保坂 三和区に下鳥富次郎しもとりとみじろうさんの碑があり、碑文の訳文を清沢さんが書いておられたが、下鳥さんの号は「鳥洗うせん」ではなく、「鳥洗」。号に謙虚な気持ちが見られる。郵便の父・前島密ひそかさんは「鴻爪こうそう」と号した。

「水鳥は跡を残さず、雪が消えれば消える」という謙虚な気持ちを示していた。松岡まつおかさんもそう。自分の家の下に隧道を掘っていい気分の人はいないだろうに。歴史に思いをはせると、その人たちが謙虚だった）ことはずいぶん考ええる。

古川 川上隧道は、掘るときに大きな石が出てきて、処理が課題になった。関山せきやま（妙高市）に土木関係に詳しい人がいて「下に落とせ」と言われ、石の下を掘ってそれを落としたという逸話が残っている。昔の人の知恵は素晴らしいな、と感じている。

上江用水が世界かんがい施設遺産となり、地域に大きな宝物ができたと思っている。それを維持管理していく、という大きな宝物もまたできた、と思っている。地域のみなさんに知っていたら、という営みを続けていくには、人とのつながりが大きくなっていく。

平成三〇年には川上地区の公会堂を改築する予定だが、地域に残る用水関連の古文書を集めて展示スペースを設け、地域や皆さんに知っていただくことをしていきたい。



保坂 昭子氏／古図、古文書所蔵者。
水利番の保坂甚十郎の子孫

平成二九年は関川水系土地改良区の計らいで地元見学会を開いてもらい、隧道の中を見学することができた。我々がカジカを捕まえて遊んでいた場所がそんなに意義のある場所とは知らなかったし、嫁いできた人たちは初めて隧道に入った。ありがたいと思っ



古川 守氏／妙高市川上区長（地域貢献活動）。
絵図、面聖復元、浅野用水歴史研究

慶応年間に着工し、明治四年に完成した手掘りの隧道（浅野用水）がある。子供会や土地改良区からも見てもらい、水を流すことがどれだけ大切か、農業だけでなく防災・防火にも意味あることを知ってもらっている。

清沢 下鳥富次郎については、関山神社に毎年お金を寄進して五穀豊穡を祈願する行事があり、文化年間に亡くなるまで、そういう精神的なことでも働いていたことを紹介したい。

これから残すことと言えば、古文書はすぐ読めないが、絵図を普及してほしい。「これが昔の上江用水の姿。今は三面張りですムーズに水が流れていくが、そうでなかった時代もあったことも後世に伝えていく。水をめぐるとかありさまも、けんかは悪いことだが、互いに何を考え、説得しようとしたか。人間の生き様が残っている。昔の人の苦勞を知ることにも勉強になると思う。

岡本 清沢さんがおっしゃった絵図面を見て感激した。ぜひ同じ縮尺で写真にして記録に残したい。古文書はわりあいと残っているが、絵図面は少ない。あの絵は絵の具がすごい。ぜひ記録し、

みんながいつでも閲覧できるものにしたら良いと思う。また当時の改修工事などの費用がいくらかかったか、現代風に数字で残せたら良い。

清沢 絵図は四種あると思う。佐渡では佐渡金銀山の絵図や資料を世界遺産登録を目指してホームページで紹介している。参考にしたい。

岡本 農業用水が改良されるたびに生態系が貧弱になっていく。コンクリートの三面張りに影響があるのではないか。そうなる以前は田植え時に水田へ魚が入ってきて、それが川へ戻って子孫を伝えてきた。三面張りになって安全性は向上したが、魚や昆虫が住めなくなると、環境が単調になってきている。何か安全・安心と豊かな生態系を両立させ得る技術はないものか。用水補修などの際にそこまで考えてもらえたら良いと思う。

司会 保坂さんの家にはかつて、水を引くために集まった男衆が集まったそうで、それが地域紙で平成二八年一月に報道された。

保坂 毎日のように出入りしていたので、私はプライベートも何にもない生活。蓑や笠をかぶった人がやってくる、食べかけの朝食まで出して接待したものだ。上江用水の現代化は自分のことのようにだ。

ひとつ注文がある。上江北辰神社の碑文はあのままにしておくと、いずれ読めなくなってしまう。石ころになってしまえばひ読めるように維持してほしい。お願いします。



後世に伝えておきたいメッセージ

語り継ぐ上江用水の苦悩の姿と残影 (手紙の反訳)

●上江用水と保坂家との関わり
(旧)中頸城郡高土村大字妙質の保坂家では、上江用水の下流部に位置する「新組」の詰所・宿(以下、妙質の宿)を営んでいた。安永元年(1772)~天明元年(1781)に、上江用水の功労者の一人である下鳥雷次郎が中心となり上江用水開削に携わった人々や悲願であった通水後に水番を担う農民達が妙質の宿を訪れていた。また、昭和24~35年頃の上江用水改良事業が始まって、妙質の宿(我家)の役割も長い歴史に幕を閉じた。このことは、上江用水が土側溝から三面護岸になり水が潤滑に上から下に流れたからに外ならない。保坂家では、上江用水の苦悩の姿を伺える百点余りの古文書、見事な上江用水絵図、碑原文、用水紛争訴状等が200年以上に渡り代々家主に受け継がれてきている。

●農民の姿、苦勞、争いの歴史
当時、上江用水の古組33か村、新組31か村があり、水上、水下の厳しい力関係が垣間見えていた。妙質の宿で年3回の酒宴の席でも、上座、下座は水の流れる上下で定められ、膳の高さも異なる。当然、妙質の宿の女衆は賄いに振り回される日々を過ごしていた。また、上下流の農民による水の争い事に欠くことがなく、その裁量や仲裁の場にこそ妙質の宿の役割が必要であった。

●下鳥翁(下鳥雷次郎)の功徳に想う
農業の起源となった上江用水が現今に至る迄の農民の姿、苦勞、争い、願い、祈り、血の滲む先祖の姿を深く想いたい。下鳥翁は、今の現実を如何様に想うだろうか。

「岩を繰り 水を心にまかせつつ ながれの民の栄へいさしき」
下鳥雷次郎(本名 英輝、号 鳥洗)

平成29年12月
保坂昭子

